

目的 現代の社会は、産業の工業化とともに急速な変貌をとげ、住環境にもいちじるしい変化をみるようになったが、人間の生活が、多くの場合一つの基点を求めて営まれるという本質を含んでいる以上、一定の地域における住環境が整備され、好ましい人間関係が保たれるよう配慮される必要がある。それらの住環境がどのようなものであるかという事は、その地域特性に応じて個々の相違は認められようが、最も基本的な要素はありうるであろう。本研究は、こうした観点から既存の集落構成組織をみることによって、近隣関係に対する一つのアプローチとするものである。

方法 調査対象地は、大分県日田市豆田町。戸別訪問による面接聞き取り調査を行った。調査期間は昭和46年3月。

結果 調査対象地の豆田町は、明治初年まで城下町として栄えたところであり、対象地域の宅地割は、四方の道路によるいわゆるブロック状の区画の中に、道路に面して間口を狭く、奥行の長い型をとっている。

豆田町の町内組織は、豆田第1と豆田第2に大別され、各町内の住宅はそれぞれ上町通り 御幸通り(以前は下町通り)という道筋に向いあってあり、各町内のもとに10軒前後で1つの班を形成している。

今回発表の研究は、昭和45年度科学研究補助金による“日本の都市・集落・町家の空間構成に関する研究”の一部としてなされたものである。